

早稲田大学 文化構想学部 英語 講評

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	90分
特徴・その他	例年通り、設問数が5題で、マーク問題が38題であった。問題文のトピックは科学論、知覚論、言語論、学習論、「迷信」と「理性」をめぐる宗教史など、大学入試で頻出のテーマが満遍なく出題されている。受験生としては、日ごろから自然科学、社会科学、人文科学などの分野は問わず、できるだけ関心の幅を広げておくことも成功のカギとなるだろう。問題は大問Ⅲがやや難化したことを除けばほぼ標準的であり、英文の長さも昨年度並みである。Ⅴの要約問題はやや焦点を絞りにくいところがあり、やはり4語から10語で書くという制約はかなり厳しいため、英作文の経年値と能力が問われるだろう。語彙のレベルは、大問Ⅲを除けば、本文においても選択肢においても、それほど難解な語が頻出しているわけではない。また、英文に関しても過度に難解な構文は問われていないため、一定時間内で正確に文脈を把握する読解力を鍛える勉強が求められるだろう。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	適語補充問題	昨年度に比べると、4択で問われる単語は易化した。(B)14の選択肢、advert, introvert, revert, そして正解の subvert(打倒する)を除けば、受験生にとってほぼなじみのある単語だったと思われる。(A)と(B)を合わせて14題の出題のうち、2題において前置詞が問われているが、これも解答の推測は決して難しくない。(A)の科学論、(B)のホメオパシー論のどちらも、込み入った知識がなくても、標準的な英文を読んで、前後の意味連関、ないしは語彙連関を把握できれば、それほど時間をかけずに解答できるはずである。	標準
II	内容一致問題	(A)はしばしば出題される知覚論、(B)はこれもしばしば出題される言語論(“smart”という言葉の意味の変遷)、そして(C)は「技能の習得」をめぐるパッセージ(広く言えば「知識論」)である。(A)と(B)は共に3段落からなる短い文章で、(C)は1ページほどの文章だが、語彙や文章のレベルは標準的である。(A)の内容合致は、本文に正解の選択肢とほぼ同じことを意味する文が出てきており、本文と選択肢の英文を誤解しない限り、それほど難しさはない。(B)の18と19は、やや迷うポイントがあったかもしれない。18は選択肢bに出てくる wisdom という語が、smart という語の意味変化をめぐる本文の趣旨と真逆であることが分かれば、順当に a を選べるだろう。また19はタイトル選択の問題なので、全体の趣旨を反映している選択肢を選ぶ必要があるが、d の The Smart Words に引きずられずに、「意味の変化」という論旨を踏まえて b を選べるかがポイントである。(C)に関しては、本文を誤読しない限り、正解の選択肢を選ぶのは難しい。全体としてやはり早く正確な読解力が問われている。	標準

番号	出題内容	コメント	難易度
III	脱文挿入問題	この問題に関しては語彙もやや高度であった。idolatry (偶像崇拜), heresy (異教), pejorative (軽蔑的な), etymology (語源), pagan (異教徒), atheist (無神論者), condescending (見下すような), armour (鎧), sorcerer (魔術師) など、受験生があまり見慣れないであろう単語も選択肢や本文中に見られた。もちろん、単語の基本的意味を押さえておくことはスムーズな読解にとって必須であるが、文脈からおおよその意味を推測することも不可能ではない。「宗教」をめぐる文章はしばしば出題されるが、この話題へのなじみによっては読みにくい文章だと感じられたかもしれない。やはり広い関心を持っている方が、英文を読むうえでも有利であることは間違いがない。解答の選択も決して容易ではないが、本文の文脈把握はもちろんのこと、however や also などの副詞、選択肢の中の指示語の指示対象など語のレベルの連関がヒントになって解答を推測することができるように作問されている。受験生としても、このようなスキルは脱文挿入の問題を使って日ごろから練習をしておくべきである。	やや難
IV	会話文問題	気候変動をめぐるニュースキャスターと気象予報士の間の会話である。難易度は昨年度並みである。選択肢の meteorological (気象学の) は受験生によっては難解に思えたかもしれない。また7つの解答に対して、13の選択肢は一見多いように思えるが、会話のやりとり特に組み込んだ部分もないため、選択肢を絞るのにそれほど苦労はないだろう。35はやや迷う問題かもしれない。解答は(k) reputable であって(m) theoretical ではないが、これも前文の Some folk との「対比」をヒントに答えを絞ることを期待されていると考えられる。会話文であっても、論説文などの読解において重要な「二項対立」という考えは常に重要になる場面があるということは解法を考える上で知っておいてよいだろう。	標準
V	要約問題	2段落からなるパッセージで、例年並みの分量である。事実の認識」をめぐる本文の内容は決して高度ではないが、the public に焦点を当てるのか、the scholarly community (学会) に焦点を当てるのかという点にやや迷いが生じたかもしれない。というのも、第1文は the public に言及しているが、本文以下、雪をめぐるエスキモーの語彙をめぐる論旨のかなりの部分を学者の振る舞いについての記述が占めているからである。解答はやはりパラグラフリーディングの原則にのっとって、パラグラフの第1文で主題の方向性が示されていると考えたうえで、the public、つまり「一般の人々」に焦点を絞って書くべきであろう。解答はほぼ最初の一文の言い換えに相当する。このピンポイントの傾向はここ数年続いているので、受験生はそのことを念頭に置いておくことと有利に解答を進められるだろう。また4語から10語という語数制限はかなり厳しいが、これはどれぐらい英作文に精通しているかを試されているということである。本文の内容を集約できており、かつ文法的に正しい文を書くには、英作文の十分な練習となるべく多くの英文に触れているという経験値、言語能力一般が必要であり、それらが同時に問われていると考えられる。	標準